

# 方向

第七三号 一九八七年一月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

慧 晃 律 師 (四) 赤 谷 明 海

〈学究〉 戒 学

戒律は律師の家業である。従つてその受学も早く『六物』に就いては既に述べたが、法金剛院或は泉涌寺に於いて『宗要』『古迹』等を玉周より学んだ事と思はれ、或は『浄心諫観』『掃敬儀』等を受けたであらう(註)。〈註〉今『珍玉集』と題する律師の写本が残つてゐるが、『大宗問答』『本朝伝律』等を集めたもので、二十歳頃の書写と見られ、泉山に於ける学律の一斑を示すものである。

ただ現存の遺品中より確められるものは、貞享元禄の交に『拾毘尼義鈔』や如空の『菩薩戒問答洞義鈔』を研究してゐる事である。而して著作の上に先づ現はれるのは、

『唐招提寺別受戒式』一卷(正蔵七五所収)

である。大通寺本の序文によれば、元禄十一年の撰にかかり、述作の由来として、蔵松院英範が戒壇の荒廢を嘆き、將軍家の庇護を得てその復興にかかつたが、当時天下四処の戒壇皆頽れて壇様の準繩を求めかね、そこで指示を律師に願つた。律師即ち『戒壇図経』『鈔』『記』等に拠り、図を以て之を指示し、遂に元禄十一年八月その落成を見た。九月十六日最勝講の法席を開いて供養の儀式とし、其の後連日壇上別受の法が行はれたが、此の

時に『旧式』とか『凶経』等を折中して作つたのがこの式一巻であると言ふのである。中に就いて旧式とは『法進式』、『実範式』及び従前所用の法式等を、『鈔』とは『行事鈔』、『記』とは『資持記』を指すのであらうと思はれる。元禄十一年は師年四十三であり、一山の与望を担つて撰じたものであり、師僧玉周が和上としてこの式に依り、撰者慧晃が受者としてその式によつて登壇受具したのである。その感懐や如何と言ひたい（註）。

（註）当時登壇受具せる者三十九人であり、今慧晃師の戒牒によつて三師七証を示せば、

和上 円巖（招提寺） 実海（招提寺）

羯磨 高算（西大寺） 照峰（招提寺）

唄 元恭（泉涌寺） 覚峰（招提寺）

教授 千紅（泉涌寺） 尊覚（西大寺）

散華 珉明（泉涌寺） 密堯（西大寺）

堂達 知空（西大寺）

である。また律師の考証になる唐招提寺戒壇院の様式は、間もなく浄嚴の資慧晃によつて東大寺戒壇院としてそのままに受け継がれてゐる。

受戒作法の要請上、これが早速諸人によつて写され、而も使用の相違上、異本を出すに到つた。正蔵所収の分は龍谷大学本のみに掲つたものであるが、これには、

「元禄十一年九月十一日書写之」

の奥書があり、受戒以前、即ち初撰本の写しであるを示してゐる。之に対し、戒学院本（註1）東大寺本（註2）法金剛院本（註3）等があり、正蔵本に对照する時、四者大同小異であるが夫々相違してゐる。是れ東大寺本が証明師たる照峰の所持本であり、法金剛院本は羯磨師の所用であり、各々用途に従つて取捨が加へられたものであらう。

（註1）法金剛院旧蔵の本を写したもので、卷首及び中間を欠いてゐる。

（註2）奥に「正徳元年辛卯八月九日以唐招提寺牟尼蔵院長老玉竿照峰和尚所持之本書写之畢、東大寺真言院二之室良聖謹誌」とあり、卷頭に「別受戒請師函」を載せ、卷尾には正蔵本にない「戒牒事」等を附してゐる。

（註3）前掲の法金剛院旧蔵とは別なり。

而してそれ等が何れも初撰本と思はれるのにひきかへ、大通寺本は、

「右一卷正徳六年初夏重脩再治難老眼益翳筆頭不明為護法故躬自書以伝来者耳沙門照山晃 俗六十一 臘四十二」

の奥書を有する再治本であり、卷頭には自序もあり、これこそ定本とすべきものである。

宝永六七年頃は相部東塔の律疏に就いて調べてをり、写本「四分律疏」（戒学院蔵、自筆本を含む）の奥には「往昔鑑真過海大師伝法南宗二宗恰如鳥両翼今南山宗広行于世法南宗一宗伝之者少非我子孫豈能流之有志之徒思之」

と流伝の志を述べてゐるが、その学風の総合的なるを知り得るものと言へる。更に此の頃のものと思はれるものに、

『律門伝法略記』一卷 自筆本（戒学院蔵）

の撰がある。之には明かに、「唐招提寺住持沙門積玉周述」とあつて師僧の名を出してゐるが、その書は律師の筆蹟であり、而も多々自筆を以て訂正してゐる轉本である事より、律師の撰述と断ずる事が出来る。師の名に於いて示すべき何等かの事情があつたのであらうか。然し「述」なる字を「口述」と解し、律師の案文とすれば、強ひて兎角の論を為すに及ばない。扱て此の書の内容であるが、単に題名の示すが如き戒律の流伝史ではなく、初めに戒の重要性を説き、次に南山律宗は広博深奥の円頓大乘である事を十門に分つて証明し、而して三国伝律の概説を試み、終りに、国に礼儀あれば聖道昌へ、僧に戒律あれば仏法久住す、道昌へ法住すれば天神の護衛があり、それがあれば国家泰平にして天長地久ならん、実に戒は鎮護國家の第一要件であると述べ、一部の結構甚だ整然としてゐる。次に、

『菩薩戒通受遣疑鈔莊嚴記同科文』一卷 自筆本（戒学院蔵）

此の書には写本もあり、『仏書解説辞典』にも紹介されてゐる。『遣疑鈔』は招提寺中興大悲菩薩の所撰であり、その註疏としては本書が唯一のものであらうと思はれる。制作年時を示す奥書はないが、文中、

「寛元者後嵯峨帝年号、今至享保八年癸卯得四百八十年」

とあるから此の年のものであらう。次に晩年七十九才を以て撰したものに、

『律門異執儀』一卷 自筆本 (戒学院蔵)  
があり、奥に、

「享保十九年八月廿六日轉之畢 重修」

と記してゐる。先づ西天の異執、即ち二十部の分派を記し、次いで漢土相承の異論を挙げ、日域に於ける南都北嶺の異見、中世西大(寺)・(唐)招提(寺)の異義、或は戒体論に於ける天台・慈恩・南山の異説等を述べ、或は三宗三觀の分別等凡そ律門に関する異義分説を蒐め来たり、諸説の並列の中に自ら自家の立場とその優位を示さんとしたものであり、南山教学及び日本律宗の宗義を知る上に重宝なるものである。

現存する著書の中、律部に関しては以上四分四巻がすべてであり、自家の学問としてはいささか寂しい感がないでもないが、広範な研究領域を有する律師に、これのみを要求することは出来ない。それよりも、四部の書が現に我々の手許にのこされてゐる事を幸福としよう。

其他

以上諸種の部門に亘つて律師の学問的業績を調べて来たのであるが、尚附記すべき資料が二三残つてゐる。先づ、

『延命地藏菩薩經疏』(仮称)一卷 自筆本 (法金剛院蔵)

である。現今破損して容易に判し得ないが、たぶん『地藏經』の註疏であらう。律師の署名はないが、轉本であつて筆蹟より明かにその自撰である事を知り得る。又『盂蘭盆經疏新記』の手沢本が残つて居り詳細な傍註が施

されてゐる。次に師の『法華』に関するものとしては、法雲の『義疏』の中、欠けたるものを自ら写して補つてゐる程度の証拠しかない。天台学に関しては、勿論一応の素養は得てゐたものであらうが、左程深入りしなかつたものと思はれる。最後に『仏祖三経』の講談のあつたと思はれる事、『大千照州年譜』によつて前にいささか触れた通りである。

#### 寺 務

既に律師の講学研究の大概を示し、所撰の典籍を紹介したが、今茲に師が董監中の諸寺院に於ける事業を略説し、行事記録に関する書冊を掲げ、終りにその知友と子弟に就いて教言を試みようと思ふ。

#### 法 金 剛 院

師が出家得度したのは法金剛院に於いてであるが、既に相当の年齢に達してゐた關係か、直に亭子院を与へられてゐる。亭子院は名刹であり、寛平法皇の勅願所として創立されたが、後世諸所に転じ、結局法金剛院の塔頭としてその名目を存したのである。然し律師の当時単なる称号としてあつたのではなく、矢張り一通りの土地建物をも有してゐたと思はれる。と言つて地理的な關係上、常に本坊に出入してゐた事勿論である。亭子院慧晃の名稱は貞享四年頃までの記録に見え、それ以後は法弟慧中に譲られたものらしい。而して律師が泉涌寺の西堂職に上つた時期は明かでないが、恐らく亭子院を譲つた当時の事と思はれる。即ち三十二、三歳の頃である。此の頃までに既に『俱舍』『因明』に関する業績を発表してゐるが、寺務に煩される事なく専心勉学して得たものであらう。ところが元禄三年二月、玉周、円融菴に退いて法金剛院を律師に依嘱し、六年に至つて表向に隱居を披露

した。当時法金剛院には塔頭直末合して六ヶ寺程あり、本山たる招提寺、その系統の壬生寺、又照珍以来本寺の如き泉涌寺、その系統の大通寺、の間に絶えず出入があり、山崎神宮寺を監理し、御室御所へ参上する等決して閑棲の場所ではなかつた。律師と雖も再三江戸へも下つてゐる。かかる間にあつて為し遂げた大事業が宋版一切經の重修である。破れたるを繕い、經藏を建立し、実に前後十年を費して五千余卷を完備せしめたのである。その発願に関しては自撰の、

『一切經修補勸進帳』一卷 (法金剛院藏)

の中に明かであり、典籍の實際に就いては数本の遺品の上に窺ふ事は出来るが、現今の經藏には、貝林制法を記した一枚の板札のみが空しく掛けられてゐるに過ぎない。この經藏重修の事業が、師の法金剛院住持としてなした総てであり、他に何の事件もない。ただ宝永四年九月、後金剛院御室の導師を勤め、その『御葬送記録』一冊を留めてゐるのみである。其の後正徳二年泉涌寺住職として世に出るが、それは長老職五名の輪番制であり、半年に一ヶ月上山する以外は殆ど当院に於ける生活であり、享保四年六十四歳で裏山の円融菴に隠れるまで、約三十年間当院を監理した訳である。

孤山雁信

— 赤谷明海書翰集 — (一七)

原田憲雄編

★1985.8.8 井村千鶴氏宛。葉書。宛先、宇治市南陵町一丁68。差出し名、孤山老生。  
南陵の内侍千鶴の局よりテレホンにておとずれありつればかえしとて

秋立つとこよみにあれど油ぜみ暑いわいなとなき叫ぶなり 伊勢守赤谷朝臣明海

暑いさ中、便所取替工事が始まり、身体の排泄孔に栓をして辛抱我慢の苦行中、いつになったら出来るんやとき  
けば 十日間は御辛抱とのこと、それまでに噴出は必然、桜島の如く、いずれ南陵町にも黄色の降灰あるべし。  
御身大切に。

★1985.12.26. 同氏宛。葉書。墨書。差出し住所、宇治市伊勢田町中山七三。

その後も お疲れも出ず お元気にお過しなされ候や

四日は新年宴会の、お招きの といった程の席ではありませんので もしお暇でしたら ぶらりと お越し下さ  
い、 右 念のため、

尚、今度はワン公へ小笹道郎氏へは犬かき始めとかで欠席、雲助佐衛門へ川崎泰市氏へは駕籠屋の仕事始め  
か これ又欠席とか云っています、田辺のバキサンへ大崎三郎氏へは不明です。十二月廿六日

★1957.2.1. 原田憲雄宛葉書。差出し住所、京都府綴喜郡八幡町園、法園寺。

先晩は失礼しました 泊まってくれと云うのも忘れていました。過分の祝儀をいただき どうしたのかとまだ  
戸まどっています。寺の方のことはいよいよ持久戦にもちこみました。あれから何の動きも出てこなかったの  
です。ところで小生等の生活計画は三月十四日世帯を合わし、同十七日(日)披露ということに決めました、披露  
というのもおこがましいようなものですが 当日午後三時半から東洋亭(木屋町三条下ル二筋目東入南側)で行  
います。入学期でお忙しいでしょうが 何とか都合をつけて是非御出席願いたいです。服装は平常着のままでお



越し下さい。此方の側は君の外、杉田（莊作）、坪井（清足）、静谷（正雄）、故選（典行）、生山（四郎）と身内一人です。東征伝長屋王詩の下二句、気に入らないまま原文を忠実に「御弟子に捧げまつり、来世の縁を結ばん」と訳して奈良女大の方で点訳して貰うことになりました。

★1957.3.13. 同宛。手紙。前便にみえる結婚披露の写真二葉のみ。

★1957.6.18. 同宛。葉書。

「夜の歌」へ原田憲雄が「ばん詩集」御惠贈有難うございます。孜孜として根気よく机に向っている様子が目に見え、今更ながら感嘆しています。歌の内容については小生には批評の資格がありません、ただ近作の「妻」「墓石」「掌」から偲ばれる君の姿が余りにも淋しくて、何とかならぬものかと此方も歎息しています。小生全く学校づとめだけで手一杯、論文関係の仕事には全然触れていません。帰るのもおそく、早く帰っても畑仕事、夜食事が終ればもう九時過ぎです、畑といっても草だらけですが、今朝キューリの初物をとりました。今月下旬森田曠平が入洛する由。この機会にでも集りましょうか。奈良の問題はそのまま。物語東征伝点訳本が出来上りました。十八日夜

★1957.8.29. 同宛。葉書。

「黒薔薇」へ「嵯峨耕遺歌集」。原田憲雄・禹雄編へ入手いたしました、代金も指示の通りお送りしました。長い間歌を見る興味を失っていましたが、この歌集ばかりは一気に読み了えました、素直な歌だけにその人間と生活とがよく通じてきました。己ばかりにかかづらわっている自分にも癡者の心情に同ずるだけの心を喚び覚されまし

た。己の健康の有難さも利己的な意味でなく意識させられました。こうした機会を与えてくれた事を御礼申しあげます。休みもはや三日を余すのみ。草刈りに精を出しています。読書の方はさっぱり。例によって後悔と焦燥だけは十分味っています。休み中さえお尋ねするだけの気まめさがなかったのですから学校が始まれば尚更でしょう。自分のものでもない知識の切り売りを想って、九月を迎えるのが大儀でなりません

追伸 方向七号拝受しました

★1957.10.1.同宛。葉書。

先日は態々学校までおいで願ったのに、ぐずぐずしてお目にかかれず失礼しました。龍大へ教育へ実習生の批評をやっていたのです。それにこう日が短くなつては氣分的にあせります。毎日学校と住居とを往復しているだけです。けっこう忙しく、全く機械的な勤め人の暮らしになってしまいました。帰って飯を炊き、家内の帰るのを待つと一緒に食事を終えると、とたんに睡くなって、それまでの張りつめていた読書への意欲が消えてしまいます。明日は明日はと一日のぼしのくりかえしです。何とか生活をかえようと目下婆さんがしをしています。無理をして、どちらか病気にでもなればさっぱりですから。十月一日

★1957.10.29.同宛。葉書。

「墳墓」へ原田憲雄が「ばん歌集」頂戴、有難う、いまさき帰ってきて手にしたところ、美しく出来ています。活字とは違って兄の見慣れたプリントがかえって親しくていいです。肖像へ原田恭仁子刻の版画、なかなかきいています。千美さんの文と後記をとりあえず拝見しました。香落溪の歌がちらつと見えています。この辺のと

ころ ゆっくり楽しんで拝見します、明日から中間考査、とりあえず御礼言上まで 二十九日 夜

★1957.11.16. 同宛。手紙。

先日電話でお尋ねした件につき 本人から別紙のように云ってきましたので 御手数ですが 御教示願えれば有  
難いです、へ教員免許をとる単位取得についての照会へ

日が短くなったせいか ただ学校へ通うことだけで あわただしい暮らしをしています、帰ってくればほとんど  
晩、庭の草がのびてもそのまま。菊の花が咲いていますが あわただしく家を出る時にちよつとながめて行く  
らしいのです、

竜大の研究科は結局やめました、研究についての意欲や方針が消えたのではないですが むだな授業料を出すに  
も及ぶまいやめることになりました、

今日、高校の社会科学研究会で 川島織物、第一製薬、角屋、刑務所、醍醐寺といろいろ異った社会を見学してき  
ました、醍醐は 君や高田へ益雄へ、加藤へ一嶺へ等と殆ど二十年前に見て以来のことです、三寶院はきれいす  
ぎて感興はなかつたですが 境内の遠さともものさびた味は嘗ての大和古寺以上です、五重塔の修理が終わった頃  
又行きたいものと思います、

川島織物では職工の不健康な顔が印象に残り、第一製薬でも工員の笑いを忘れた顔ばかりが並んでいました、刑  
務所の囚人の方が案外気楽そうです 角屋の建物は予想以上にぜいを尽くしたもの、桂離宮の建物を街中に移し  
て使い古したらこんなものになります。学校の帰途、二回に亘り「平安時代の美術」を見に行きましたが

それでも全部を見ることができませんでした。

文化の日は職員旅行で、山代温泉へ行きました。つまらぬ旅行でした、汽車の道中が長く、旅館で会食をしたというだけで那谷寺さえ行く暇がなかったです、

右お願いを兼ねて近況を乱筆で綴りました。十一月十六日夜 明海 憲雄兄

★1958.1.1. 同宛。印刷年賀状。差出し地名は京都府八幡町八幡荘源氏垣外。

★1959.3.27. 同宛。葉書。

今日二十七日此方へ来ておはがき拝見しました。何かと会合に引っぱられて、学校から解放されたのが、やっと今日だったので、節分以来の八幡入りとて春の粧いが珍しく、陽光のもと、あの縁先に半日寝ころんでいました。山桜、椿、雪柳、水仙、ゆすら梅、桃、小梅、これらが皆花をつけ、れんぎょう、山菜萸の花も残っています、それに あれこれと木々や草々の芽立ちも見られ、蓮の芽さえ顔をみせています。せまくて庭のないアパートに閉じこもっていた者にとって、この喜びは御想像いただけだと思います。貴兄にも、御子様にも来ていただきと、実はお招きのつもりでペンをとったのですが、奈良行、笠置行、野原行きと予定のある上、四月に入れば野球の応援に行かねばならず、六日からはずっと学校、結局、出来れば小生の方からお伺いするより仕方がなさそうです。ではいづれ。

★1959.8.27. 同宛。絵葉書（長崎の石だたみの版画） 鹿児島市中原別荘にて

二十四日に京都を発ち、翌日長崎の市中を見学しました。お蝶夫人ゆかりのグラバー邸、大浦天主堂等を廻りま

したが、大して情趣も湧きませんでした。バス十一台を列ね熊本、阿蘇などを見、第四夜の今日は鹿児島です、旅程に追われ、生徒の動向に関心が片よせられて、特別変わった土地に来たようにも思いません、明日は宮崎、その次は別府泊り、三十一日に帰ります、二十七日夜

★1960.1.10. 同宛。葉書。差出し住所、伏見区桃山筒井伊賀桃山荘。

先日は御邪魔していろいろ御馳走になり有難うございました、あのあと風間君がお伺いしたそうで、結局小生が集合場所を間違えていたのでした。七日に此方へ戻りましたところ、結構な贈り物を頂戴していました訳で、何かと御配慮の程恐れ入ります、

軌道に乗れば何でもないことながら始業の頭初は教材の準備が甚だ億劫です、いやいやながら机に向かっていきます。来月の中頃になれば週四時間の授業が残るだけです。その頃又お邪魔します。十日

★1960.8.28. 同宛。葉書。差出し住所、八幡町八幡荘源氏垣外法園寺内。

先日は御馳走様でした。いよいよ八月もおしまつてきましたので、八幡を去ろうと思っています。暑いなかにも白萩が咲き出しました、カンナの花柄が延びきって、色あせた花びらが天辺に二つ三つ見られるだけ、いよいよ秋のようです。又学校かと思うと甚だ億劫ですが、これは毎度のこと、しばらくすれば人並みに動き出します。法園寺のことは、家が見つければ住職へ引き渡すことにしていますが、律寺の老僧の意見に従い、僧籍に名をとどめることはそのままにしておきます。八月二十八日

※前号正誤 一一頁七行 ★57. →★1957.

いつ頃からか、近所の風鈴の音が忙しくなったなあと感じていた。彼岸が過ぎて秋風が立つと、池の水が澄んで、金魚もあまり姿を見せなくなる。空の色が濃くなって、木々や屋根のすき間までが、塗ったようにすっかり青い。

時々、塊のような風が吹いてきて、ススキの穂が思い切りゆれ、フヨウがはずむようなゆれかたをする。まだ緑のままの桐の葉がばさっと落ちた。落ちてみるとその大きいこと、サツキの株をおおってしまう。

お向かいのHさんは、今日も道路に面した玄関の前に丸椅子を置いて、腕組みをして目をつむっておられる。Hさんの朝は、まず自分の家の前におまつりしてある町内のお地藏さんを拝み、その奥の尼寺を門の外から拝み引き返して、こちらの寺に手を合わせ、それから丸椅子の位置をきめて、腰かけることで始まる。

夏の間は、朝六時頃から座って、朝刊を受け取り、その場で広げておられた。八十才だということだが、老人という感じのしない人である。眼鏡もかけずに新聞を見ておられる。

家の前が東西の通りで、玄関からはまっすぐ家の奥へ北向きに台所へ通じているから、台所への戸を開けておけば、Hさんの丸椅子は、風の丁字路に置かれていることになる。

新聞を見終わった頃には、勤めや学校へ行く人が、次々と通って行く。たいていのひとが「おはようございます。」と挨拶する。Hさんは、「おはようございます。ごくろうさんです。ごくろうさん。ごくろうさ

ん。」とこたえる。その後は朝食になるらしくて、しばらくは姿が見えないが、済むとまた椅子に掛けて目をつむっておられる。

野球も相撲もみないらしく、テレビで放映される時間にも、やっぱり丸椅子に座っておられる。

奥さんが亡くなられたのが、もう九年ほども前になると思うけれど、その後しばらくして仕事をやめられた。すぐ近くの料理屋が、Hさんの生家でHさんは先代の主人の弟である。先代が亡くなってからもそこでずっと料理人をしておられた。仕事をやめてからは家において、めったに外へ出て来られることもなかったが、朝など、ちよつと外に立っておられる時に、挨拶のあとで「桜が咲いたそうですよ、お花見には行かへんのですか。」とたずねてみると、「私は若い時から、見たいものは見、行きたいところへは行き、したいことはみんなしましたさかい、もう何も見たいものもしたくないこともおへんのどす。」と言われた。

「毎日、仏壇の前で、婆さんに「まだか、はよ迎えにこんかい」と言うてますのやが、もう早う参りとうてしようがおへん。そやけど、なんせ私は今まで病氣というものをしたことがあらしまへん。このあいだちよつと腰が痛うなって、向かいのえびすさんでマッサージをしてもらいました。そしたら先生が、「Hさん、あんたの体は、こら百年もんどっせ」と言わはるのですわ。」

婆さんなどと言われると、聞く方が意外に思うのだけれど、奥さんは若々しくて、西陣生れの生粋の京美人だった。踊りが好きで、町内の盆踊りなどには、手拭いをかぶって、ゆかた姿で、若い人たちより楽しげに、じょうずに踊られたものだと言ふ。

その奥さんの所へ行きたいとばかり思い暮らしていたのに、百才まで生きると言われたのでは、いよいよつらかったのだろう、少しお酒が過ぎたらしくて、体をこわし、しばらく病院へ入られた。

回復して今年の春から玄関に座るようになり、それからは早う参りたいなど言われなくなった。そして八月の地藏盆の頃からは、軒下に並んだ奥さんの形見の鉢植えに、毎朝、水をやるようになり、最近では、道路にもじよろで丁寧な水を撒いてくださる。

一日のほとんどは、じっと目をつぶって腕組みをしておられるが、どんなことが想い浮かびますかとたずねてみたい気もする。しかしよけいなことを言ったら、うるさくなって、また家の中へひっこんでしまわれるかもしれない。邪魔をしないに限る。

Hさんの生家の料理屋は、志賀直哉の小説「暗夜行路」に出てくる店だということであるが、その頃十四才くらいだったはずのH少年はどんなだったろうか、川端康成の小説「古都」にも出てくるが、その頃は働き盛りだったHさんに、どんなことがあったか、聞いてみたい気もする。すぐ近くではあっても、私には用がない高級な料理屋だから、軒の低い格子造りの特徴のある店を外からは見るけれども、中のことは知らない。時々、祇園あたりのきれいな人に乗せた黒塗りのハイヤーが、数台つらなってやって来て、そのあたりで時間待ちをしながら運転して来た人が立ち話をしていたりする。中の様子は小説を読んで少し想像するだけであるが、Hさんはそんな家に生れて、ずっと七十才を過ぎるまで、料理をして来たのだけれど、店のことは話さない。それが客商売をする人の心がけというのだろうか。



それにしても、あくびもしないでいちにち腕組みをして、Hさんの考えることは何だろう。

夕方になって、ぼつぼつ人が帰ってくる。町内の顔見知りバス通りを折れて、この小路に入ってくると、Hさんは「お帰りやす。」と声をかける。年配の夫婦などはにこにここと笑って会釈する。主人の方は笑っているだけけれど、女の人は何か言わなければいけないとおもうのだろう、「お墓参りに行って来ました。お彼岸によろ参らなんださかい、だいぶ遅うなりましたんやけどな。」などという。「ああそうですか、お墓参り。そろけつごどした、ごころはんです。」とHさん。夫婦はもう一べん会釈をして、にこにここと通り過ぎて行く。

そのあと夕刊を一通り見終わって、Hさんは少し散歩をする。二十メートルほど西にある生家の店の前まで行き、ちょっと中をのぞいたり、あたりを眺めたり、人がいると声をかけたりして、またゆっくり引き返してくる腕を上げたり振ったりなどはしない人だから、そんな時にも後ろに手を組んで歩く。それでもやっぱり老人という感じはしない。

お地藏さんを拝んで、尼寺を拝んで、こちらの寺にも手を合わせ、丸椅子をかたづけ、Hさんは家へ入る。一歩踏み込んで、必ず後ろ手に戸を閉める。その時にHさんが後ろを振り向かれたのを私は見たことがない。

ほんとうにえびす堂の先生が言ったように、Hさんの体が二百年も二千年も二万年も腕組みをして考え続けることになる。

朝夕は少し寒さを感じるようになって、長袖のジャンパーを、娘さんが肩にかけてあげられた。そしてめずらしく、Hさんが枯れかけてきたアサガオの鉢の前で、腕をほだきそつと何かをつまみ取っておられるのを見た。

「このようにわたしは聞いた」を妙法華は「如是我聞」、正法華は「聞如是」とし、一ある時、世尊はラージャグリハにおいてになった」を妙法華は「一時仏住王舎城」、正法華は「一時仏遊王舎城」とする。「おいでになる」と拙訳した *viharati* は「愉快に過ごす、散歩する」の意だから「住」でも「遊」でも差支えない。拙訳の「世尊」を妙・正両本とも「仏」とするが、梵本はすべて *bhagavān* で「尊敬すべき」意の形容詞 *bhagavat* が男性名詞として用いられた単数主格。インドでは弟子が師を呼び掛ける時に使うから「先生」というほどの言葉。仏典ではゴータマ・ブツダを指し、漢訳で「婆伽婆」「薄伽梵」等と音写し「世尊」「仏」等と意訳する。世尊とは、世にも尊い人という意。仏は、*buddha* のことを中央アジアで *budh* か *but* と発音されていたのを漢字に音写したものらしい。目覚めた人、究極の覚者、の意である。釈尊は究極の覚者だから、ここで仏と訳して間違いはないが、*bhagavān* が他の所では「世尊」ともされ、その訳し分けの理由が必ずしも明らかではない。ラージャグリハ *Rājā-grīha* (パーリ語ではラージャガハ *Rāja-gaḥa*) は、王の住居、の意だが、マガダ国の首都の固有名で、「王舎城」と漢訳することが多い。マガダ国はガンジス河中流南方のビハールの中のパトナーとガヤーの地方にあたり、ラージャグリハはパトナーの東南約一〇〇キロの所にあった。

釈尊は、今のネパールの地にあったコーサラ国に属する小国の王子として生れ、二十九歳で出家し、ラージャグリハにやって来て、マガダ国王のビンピサーラに出合った。王は、財産や軍隊を与え援助しようといったが、

釈尊は断り、都城の西ウルヴェーラで修行し、約六年後、悟りを開いた。ブツダ、覚者、となったわけである。ウルヴェーラはこれに因んで後にブダガヤと呼ばれる。以来、八十歳の入滅まで四十五年間、アング、マガダ、ヴァッジ、マッラ、コーサラ、カーシ、ヴァンサ等を中心とするガンジス河の本・支流域の諸地、さらにジャムナー河流域のクル、パンチャール方面まで教化が伸びたようだが、説法の多く行なわれたのは、コーサラ国の都サーヴァッティと、このラージヤグリハであった。

『大智度論』は、『摩訶般若波羅蜜經』の注釈だが、仏教百科事典の趣があり、訳者が妙法華と同じクマールジーヴァだから『法華經』を読む上でも好参考書である。『摩訶般若波羅蜜經』の説処もまたラージヤグリハのグリドラクータ山であるところから、釈尊がこの経や多くの主要な經典が、ほかの都市ではなくラージヤグリハでなぜ説かれたかを、「住王舎城釈論」(卷三)で説明している。

釈尊がここで正覚を得た。すぐれた思想家たちが集まっていて、対論し、布教するのに効果が大きい。郊外には山林が多く思索・修行に適し、托鉢して生命を維持するのに便宜である。一般に文化が高く住民が教化を受入れるまでに成熟している。等々。

中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『大無量壽經』の註には、ラージヤグリハとグリドラクータ(パーリ語ではギッジャクータ *siṅgha-kūṭa*) について次のようにいう。

王舎城(原名 *Mājagṛha*) はマカダ国の首都。釈尊の在世時代、この国はガンジス河の北にあるコーサラ国(首都は舍衛城)と並んだ強国の一つ。現在、ラージギルと呼ばれ、旧および新王城の址や仏教遺跡・ジャ

イナ教祠等が往時の栄えた面影を伝え、近郊にナーランダーがある。王舎城の東北に灌木林に覆われた蒼園嶮(原名Gurhralita。「驚の峰」と訳す)山がある。山頂は岩石が屹立し、この形が驚に似ているから靈驚山といわれたとも、また驚が沢山住んでいたからともいわれる。山頂は広くなく、数百人が集まれる程度のもので石窟と僧院址が残っている。本経ならびに「法華経」がこの靈驚山において説かれたという伝説があることは有名。

これでグリドラクータ山の字義・位置・形姿もあきらかである。今では日本からの仏跡巡拝団が毎日のようにここを訪れているそうで、身近かにも幾人もいるので、現地を見ない者がこんな説明をするのは気がひける。

『大智度論』には、ラージヤグリハの南郊に鳥葬場があり、そこで死屍をついばむ驚がグリドラクータ山に棲息したことを伝える。この話は、グリドラクータ山が、生と死の境界、としての意味をもったことを語るのではなからうか。スリランカに伝わった經典、いわゆる南伝大蔵経には初期仏教の説話が比較的ウブな形で保存されているという。その中からグリドラクータ(南伝ではギッジャクータ)が死と関わる話を拾ってみよう。(一)内は高楠博士功績記念会纂訳『南伝大蔵経』の、巻数・頁数、である。

一人のビクが篤病になって、ギッジャクータに登り断崖から投身自殺をはかった。箆師のうえに落ち、箆師が死んだ。(1-136)

六群ビクがギッジャクータに登り空中に石をなげたら牧牛者に当り牧牛者が死んだ。(1-136)

仏弟子マハーモッガラナーナはギッジャクータを降りるとき、骸骨が空中を行き、驚や鳥や鷹が追いかけて肋骨

の間の肉をつつので骸骨が悲鳴をあげるのを見た。(1-175)これに続いてマハーモッガラーナがおなじくギッジャクータで肉の塊を見た話、皮の無い男を見た話など十六話を記録する。

釈尊がギッジャクータにいたとき弟子のアーナンダに「この山は楽しい。修行を完成した人は、望めば寿命を超えてこの世に留まるだろう」といったが、アーナンダが「では何時までもこの世に留って教化して下さい」と頼まなかったので、釈尊は死を迎えるための旅に出発する。(1-89) この部分を含むのがいわゆる涅槃経。

仏弟子のチャンナがギッジャクータで病苦に耐えず、シャーリプトラに励まされるが、自殺する。シャーリプトラが動揺するのを釈尊が慰撫する。(11-37, 15-91)

ギッジャクータにいる世尊のところヘインドラ神が来て、涅槃について問答する。(15-164)

仏弟子マハーモッガラーナがギッジャクータで病気になる、重くなった。(16a-269)

ウパサルハというバラモンが年とって息子に「他の死骸で汚れたことのない処で自分を火葬してほしい」と命じる。息子が聞くとバラモンは息子をつれてギッジャクータに登り、ここがそうだ、という。ところが釈尊がここには前世でウパサルハと名乗るバラモンが一万四千度も葬られていることを告げる。(30-85)

このほか、直接に死とは結びつかなくても、危機的状況がこの山と結び付き、釈尊の説法によって解放される話はすくなくない。大乘仏教の經典で説処をグリドラクータに選らんだのは、初期仏教のこの山にまつわる説話を顧慮してのことと考えて間違いない。

殊に、涅槃經に描く釈尊の、死を予知しての最後の旅がグリドラクータの地から始まるのは、法華經との関連において注目すべきだろう。法華經での釈尊は、おのれの一生を回顧し、おのれの教えを総括し、おのれの死後の法華經伝持者についても予告して、法華經が涅槃經の直前に説かれたことを思わせる。經典成立の歴史的順序はとにかく、両經典に描かれる事件の順序は今いったとおりで、事件進行の順序に合わせ法華經の時間が始まる。

法華經の発端の釈尊は、小国の王子として生れ、出家し、修業し、悟りを開き、人々を教化してきて八十歳となった、尊敬すべき人物であるところの釈尊、シヤカ族のゴータマ、聖者とはよばれるが、人間世界すなわちシヤバの、ひとである。そうしてグリドラクータも、さまざまの説話によって飾られてはいても、歴史的・地理的な場所であった。

ところが、法華經のなかには、人間の生命を超え永遠の寿命をもつ如来としての釈尊があらわれる。「如来寿命品」に出てくる釈尊がそれである。永遠の寿命をもつ如来としての釈尊のあらわれるグリドラクータもまた、時間・空間を超越する。

この時間・空間を超越するグリドラクータをクマラジーヴァ訳の妙法華は「靈鷲山（りょうじゅせん）」とし、シヤバ世界のグリドラクータを「耆闍崛山」とした（「提婆品」の「靈鷲山」はまぎらわしいが、この品がクマラジーヴァ訳であることは疑われない）。正法華も「靈鷲山」と「耆闍崛山」を混用するが、区別は明らかではない。

『大智度論』にはまた次のような話を伝える。

長老のマハーカッサバはへ釈尊の滅後、グリドラクータ山で経・律・論の三法蔵を集め、衆生を教化できる  
ようにした。それが終わって釈尊に随って涅槃に入ろうと思ひ、朝、托鉢した後グリドラクータ山に登り、  
説教し「これからわたしは涅槃に入るが、わたしの体はくずれず、ミロクが仏となったとき、わたしのミイ  
ラがまた出現してこの因縁を説くだらう」といつて、山上の岩の中にはいり、岩はとざされた。八万四千年  
後、ミロクが仏となったとき、果たしてマハーカッサバのミイラが出現した。

『法華経』の「見宝塔品」の話とよく似ている。どちらの話が古いのかは判断し兼ねるが、グリドラクータが  
早くから過去・現在・未来を通じての覺者の住処・説法処とされたことがうかがわれる。

mahataは、偉大な。bhiksuは、乞食者。比丘と漢訳するのはパーリ語のbhikkhuを音写した。もとバラモン教で  
人生の第四の時期にある遍歴修行者をビクシユと呼ぶことがあったが、仏教興起時代には、諸宗教を通じて、托  
鉢する修行者をビクと呼んだ。仏教はこの呼称を取入れ、仏弟子たる修行僧を指し、戒律の確定した時代になる  
と、出家得度して具足戒を受けた男子をビクと呼ぶようになった。

sanghaは団体。「僧伽」はその音写。「僧」は省略形で、今は個々の僧侶を指すが、サンガの一員というほど  
の意である。sardhaは、一緒に。梵文を、ここで句切るかどうかは問題があるが、句切ったと見られるテキ  
ストがある。

「二千二百人のビクたちは、完全なアラカンで、愛欲を滅ぼし、苦惱から脱し、従順で、心も智慧もよく解放

されていた。素性よく、偉大な象であり、義務は果たし、仕事もして、重荷は除かれ、自分の目的は達成し、生存との結び付きは消えていた。正しい智により心はよく解き放たれ、あらゆる意志を自在に調べ、最上の岸に到達し、神通を得た、偉大な教えを聞く人たちであった。

dvādasābhir bhikṣu-sataih sarvair arhadbhiḥ kṣiṇāsravair nihkilesair vāstibhūtaih suvimukta-cittaiḥ suvimukta-prajñāir ājāneyair mahānāgaih kṛtakṛtyaih kṛtakaraṇīyair apahṛta-bhārair anupṛapta-svākrthaih parikṣīna-bhava-saṃyojanaih saṃyag-ājñā-suvimukta-cittaiḥ sarva-ceto-vasīta-parama-pāramitā-prāptair abhijñānābhijñātaiḥ mahāsrāvakaibḥ

「*dvā-dasā* は、十二からなる。*Sata* は、百。*dvādasābhir bhikṣu-sataih* は、百人の比丘の十二組で、つまり千二百人の比丘、ということになる。これを妙法華は「万二千人」とする。*sarva* は、完全な。*arhat* は、価値ある人。その主格が *arhatān* で、阿羅漢と音写し、*arhat* 供と漢訳し、羅漢とも略称する。尊敬・供養を受けるに値する修行完成者の意。釈尊の時代にはインドの諸宗教を通じて尊敬されるべき修行者の呼称であり、仏教はそれを取り入れたので、釈尊もアルハットと呼ばれ、仏の十号の一つとなった。小乗仏教では、仏とアラカンとは区別され、仏弟子の到達する最高の階位とされた。これ以上学修すべきものがないので「無学」ともいう。大乘仏教では、アラカンは小乗の聖者を指し、大乘の修行者に及ばないとする。

『法華経』は、大乘の經典で、アラカンについてももとより小乗の聖者として軽視するところがありはする。しかし維摩経のように軽んじて楽しむ風はない。そのことは追いつき明らかになるだろう。